



(図3) Sudden Shower off Shinagawa (司馬江漢・驟雨待晴図)

ボストン美術館ホームページ <http://www.mfa.org/> より



(図8) 〈亀戸梅屋舗〉によるゴッホの模写

©ÉDITIONS CARTES D'ART

江戸が受容した西洋

— 江漢の阿蘭茶白と山陽の蘭 屈 —

コーヒーミル
ワイングラス

高橋 博 巳

1 儒学から蘭学へ

一般に「儒者」という言葉から連想するのは、古くさいイメージであろう。しばらく江戸儒学に親しんでいた私も、いまや「儒者」と聞いてまず想起するのは、蕪村（一七一六〜八三）の次の一句である。

腐儒者 蕚あつものの羹あつものくらひけり

（安永六年、一七七七、『蕪村全集』I・408頁）

この句の尾形仿・森田蘭両氏による校注は、「役立たずの馬鹿儒者め」で始まる激越なものである。蕪村のこの作から二十年後に、司馬江漢（二七四七〜一八一八）が洩らした述懐もその延長線上にある。

小子等壮年の時に漢学を好みしに、とかく唐の学問をして善人になる者は鮮し、多くハ聖經をハ不学して風雅ニ流れ、文房の器械唐物を好み、居宅も唐めかしく家作して、惟遊ひにもとつく者なり、且又書物を多読ハ博覧の人とハなりぬれと、悪さかしく為る者多し、故ニ衆俗ニ嫌ハるゝ事也、（中略）中年より悪き事と見切り、今ハ理学を好み、理学とハ天地人の三才の理を云、此理を究めんと欲せハ、天地を始めとして之を窮むる事なり、天地の窮

理ハ西洋是を教への肇とす、

（『おらんだ俗話』寛政十年、

一七九八、『司馬江漢全集』III・119頁）

こうして「漢学」から「西洋窮理の学」に乗り換えた江漢は、「風雅」や「遊ひ」を排し、「衆俗」のために「天地人の三才の理」を究めようとしたという。しかし漢学に代わった「窮理の学」にしても、

我日本ハ貴人より卑つかたニ至るまで、惟遊樂たの技芸のミ好ミ、実学を好て理を究める事を不好、偶々理を云人ハ諸人ニ嫌る、故に吾も人もかくして云す、

（同上、126頁）

というように、儒学とはまた別の意味で世間には受け入れられなかった。たしかに「実学」だの「理」だのと声高に主張しては、当時、相手が訳知りならずとも総じて野暮と見なされ、煙たがられたであろう。ところでこの成り行きは、デカルト (René Descartes, 1596-1650) の思想形成を思い出させる。「文字による学問」から「わたし自身のうちに、あるいは世界という大きな書物のうちに見つかるかもしれない学問だけ」をデカルトは選び取っていたからである。その後のデカルトが「旅をし、あちこちの宮廷や軍隊を見、気質や身分の異なるさまざまな人たちと交わり、さまざまの経験を積み」（『方法序説』谷川

多佳子訳、岩波文庫」というふううに生活を一変させたように、江漢も急速に「西洋」に接近したのである。

ところが諸侯の客のなかには、「ヲタンダ」は夷狄ゆえ聖の道を知らず、人類ではないと言いつ輩までいて、「獸の属」ながら不思議と精密細工には優れているという儒者に対して、江漢は一言、「獸は人に勝る者なり」（『おらんだ俗話』121頁）と云って暴言を封じようとしているが、双方を隔てるギャップはあまりに大きく、はたしてこの皮肉が当の相手に通じたかどうかさえ疑問である。旧弊な儒者のなかにはそうした手合いがいたとしても、もちろんすべてがそうだったわけではない。

2 開明派儒者の系譜

例外の筆頭は、新井白石（一六五七〜一七二五）である。白石は学派をつくらず孤高の学者政治家として生涯を終えたが、影響は学派を超えて広まった。たとえば宮瀬竜門（一七一九〜七二一）が江戸で朝鮮通信使の一行と会ったさいの筆談記録『東槎余談』（明和元年、一七六四、自序）において、「西洋諸蕃」の「和蘭」に言及し、

其の人、長身白皙、紅毛藍瞳象鼻、毛布を以て服と為す。箆袖窄衫、氈笠皮履、余曾て之れを見る。形様情態、此の方の人に類せざるなり。

（卷上、東北大学附属図書館蔵自筆本）

と述べた条は、『采覧異言』の次の記述に酷似している。

其の人、皆な長大にして色皙く、赤髮蓬首、藍睛、白を点ず。男子は頭に氈笠を戴き、衣物多く毛布花布を用う。箆袖窄衫、僅かに支体を容れ、其の長さ、膝に至る。

さらに同書には、「俗、素より多智、兼ねて天文地理に善し。道の経る所、国地山川、遠近夷險、其の地氣風俗物産、皆な誌有り。万国輿地全図、由りて作る所なり」（以上、卷二、『新井白石全集』IV）というような記述があり、竜門も、「其の人、諸什器を製すること、皆な精巧、；又た天文地理に精しと云う」と似たような発言をしている。また同年、赤間が関で通信使の応接に当たった滝鶴台（一七〇九〜七三）は次のような見解を示している。

凡そ天地の間、聖人の道に尚くうること莫し。然りと雖も、後世の儒者、道を以て己が私有と為し、同を標し、異を伐し、中国を貴び、夷狄を賤ずるを以て務めと為す。是れ識見の陋、天地の大なるを知らざる者なり。（中略）彼の中華聖人の国にして、其の人の姦悪、蛮夷より甚だしき者有り。僕、明清律に於いて之れを見る。凡そ律條の載する所、姦騙凶悪の甚だしき者、皆な吾が邦の人の未だ嘗て知るに及ばざる所なり。又た和蘭の色を二にせず、国に乞食無きが如き、皆な中国の及ばざる所なり。

（『癸甲問槎』一、明和二年刊、『鶴台遺稿』十、安永七年刊）

鶴台のこの条にも白石の遠い筈を聞くことができるかもしれない。というのも『采覧異言』の「エウロパ、欧邏巴」の条には、

然れども天教の法、他犯を以て大戒と為す。故に其の法を奉ずる者は、貴賤に論無く、一夫一妻、夫死すれども再嫁せず、妻死すれども再娶せず。子無くして嗣絶ゆ。往々にして有り。

と記されているからである。むろん、このような説は西川如見（一六

四八〇一七二四)も、

伝へ聞、紅毛国の作法には、総て男子兩妻を持事あれば、罪科を受ける也。たとへ子なしといへ共、是天命なりとて、別の女人に子を需むる事をせぬ法律なり。此のゆへに、妻あるものは、遊女等を翫るときは、刑罰を受ける国法なり
人道は唐土本朝のみ、厳密なるにあらず。

〔『百姓囊』三、享保四年跋、『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』岩波文庫〕

と記しているように、こうした人々のあいだでは世界の中で「唐土本朝のみ」が例外であると認識されていたことがわかる。

したがって鶴台において注目すべきは、さきのように説き起こしたあと東アジアから「西洋」にまで視野を一気に拡大している点である。

宇宙の大なる、邦域の多き、此くの如くして、其の国には各おの其の国の道有りて、国治まり、民安し。乾毒けんどくに婆羅門ばらもんの法有り、釈氏の道と並び行わる。西洋に天主教有り。その他、回回教・囉嘛法の如き者、諸国或いは皆な之れ有り。夫れ作者七人、皆な開國の君なり。天に継ぎて極を立つる者なり。利用厚生りようこうせいの道を立て、成徳の道を立てるは、皆な天に代わりて民を安んずるなり。国治まり、民安くば、又た復た何をか求めん。何ぞ必ずしも中国の独り貴くして、夷教の廃す可けんや。故に君子の道は器を成し、材を達し、以て安民の用に供す。其の志を得ざるや、天を楽しみ命に安んじ、優遊して歳を卒う。又た復た何をか求めん。

〔『癸甲問槎』一〕

こうして鶴台は「宇宙大」の視野に立ち、「婆羅門の法」から「天主

教」は言うに及ばず、「回回教」まで、「夷教の廃す可」からざること
を力説している。儒者の領分をはるかに超えて、二世紀後の今日なお
実現の容易でない視点を鶴台はいかにして獲得したのだろうか？

鶴台は朝鮮通信使にむかって、「僕、少きより学を好み、遊を好む」といって、「東都、平安、長崎」と曾遊の地を列挙し、「海内の名勝、粗ぼ経遊することを得、海内の知名、粗ぼ交遊することを得たり。又た清国の人物、荷蘭諸国の人に接見す」〔『鶴台遺稿』七〕というように、旅の経験と幅広い交友があった。そのなかには師の山県周南（一六八七〜一七五三）や服部南郭（一六八三〜一七五九）をはじめ、秋山玉山（一七〇二〜一七六三）や細井平洲（一七二八〜一八〇一）らの儒者ばかりでなく、医家の吉益東洞（一七〇二〜一七七三）や山脇東洋（一七〇五〜一七六二）、それに仏者の無隱道費（一六八八〜一七五六）までが含まれていた。それも単なる交遊ではないことが、たとえば道費の「滝弥八の来訪を謝す」に付された「引」からも明瞭に伝わってくる。

滝生は実には天下の奇才なり。其の深く儒術に達して言語炙輶じやくたるに論無し。傍ら吾が仏学に精し。故を以て余と方外寡二の交を為す者、平生の贈答を見つ可し。

〔『無隱和尚雜華集』二、宝曆十年刊〕

「炙輶」は弁舌がさわやかなこと。「方外寡二の交」は俗世間の外で二つとない交際の意。これに加えて、長崎での作「崎陽の席上、某人贈らるる作を和す」には、「某は紅毛の訳を善くす。兼ねて西洋天文地理学に通ず」と割注が付され、その末句には、

逢君初識大東盛 君に逢いて初めて識る 大東の盛んなるを
誰道殊方重訳難 誰か道う 殊方 重訳難しと

（同上）

というように、オランダ通詞とも交流があった。「殊方」は外国、オランダの意。長崎に来て初めて「大東の盛んなる」ことがわかったというのが、いかなる事態を指しているか定かではないが、異国の文物を夷狄視するような偏狭さとは無縁だったことだけは確かである。

また宮瀬竜門にしても、その交友範囲のなかに幕府医官の野呂元丈（二六九三〜一七六一）が含まれていたように、その知識は儒者の枠を超えていただろう。「九月十三夜、呂医官宴集、得虞」を見れば、

南楼秋興満水壺 南楼 秋興 水壺に満つ

折簡相招旧社徒 折簡 相招く 旧社の徒

海嶠雲晴天似水 海嶠 雲晴れて 天水に似たり

園林月出夜懸珠 園林 月出でて 夜 珠を懸く

蓑開錦柱箏堪応 蓑開いて 錦柱の箏 応ずるに堪え

座密瓊筵客不孤 座密にして 瓊筵の客 孤ならず

他日風塵難彦会 他日 風塵 彦会難し

何妨縦飲接飲娯 何ぞ妨げん 縦飲 飲娯に接することを

（『竜門先生文集』二・四、明和五年刊）

と詠っており、精神的なつながりの強い親密な会だったことが知られる。「南楼」は晋の庾亮たちが武昌の南楼で「詠讒」を楽しんだ故事（『世説新語』容止）に拠る。「蓑」は古代、帝堯のときに生えた草。「彦会」は秀才の集まり。そういうときの話題が「西洋」に及ぶことはなかったろうか。元丈は寛保寛延年間（一七四一〜五〇）に日本

橋の長崎屋で、ドドネウス（Rembertus Dodonaeus, 1517-1585）やヨンストン（Johannes Jonstone, 1603-1675）の著述について質問するとう用向きで、オランダ人に何度も面会していたからである。

こうして竜門や鶴台は、白石に始まる開明派儒者の系譜に連なっていたといえるだろう。やがてこの流れは蘭学者に受け継がれる。杉田

玄白（一七三三〜一八一七）に漢学の手解きをしたのが竜門だったのは偶然だろうか。

3 吉雄耕牛―「西洋」紹介者

江戸の「西洋」ブームの火付け役の一人は、長崎の阿蘭陀通詞・吉雄耕牛（一七二四〜一八〇〇）だった。²⁾それはひとえに耕牛の職業に淵源するものではあるが、耕牛個人の好學と嗜好や趣味にも大いに依存している。通詞たちは蘭・唐いずれにしても、その居宅をそれらしく構えていたこと、たとえば田能村竹田（一七七七〜一八三五）の長崎よりの書簡を一見すれば明らかである。

此元の繁華ハ真ニ驚目候事。九日・十一日の諏訪祭杯ハ、三都よりも奢り申候事、尽美麗候。其他、飲食衣服迄華美ナリ。拙杯ハ、生質の唐好キゆへ、朋友中往來仕候処、何れも唐山様の屋宇・器物、先ツ一寸と唐ニ渡候心地ナリ、聞見一々新ナル事斗ニテ、只今迄疑居候事分り申候事多、おもしろき事ニ御座候。

（文政九年九月二二日、田能村如仙宛て書簡、『大分県先哲叢書』書簡篇）

この日はたまたま「和蘭陀出船」の日だったので、「火砲の声、山谷震動仕候、作此書候ニモ、数々筆ヲ抛なげうたントス」（同上）というようななかで記された書簡だけに、長崎の有様が臨場感ゆたかに伝えられている。

安永七年（一七七八）に耕牛の居宅を訪れて「和蘭陀座敷」の客になったのは三浦梅園（一七二三〜八九）で、『帰山録』には次のように記されている。

○吉雄、名は永章、字は耕牛、幸作と称す。此亭にして松村君紀に会ふ。君紀は其字、名は元綱、安ノ丞と称す。共に阿蘭陀の舌人。耕牛、西学に通ず。西洋の書を儲えて架に満つ。甚客を愛す。一日、我を招ひて酒を飲みしむ。

○吉雄亭、奇貨多し。只此時、長崎熱間、其奇貨を遍く見、其説を詳に尽す事能はず。今に是を憾む。亭上、阿蘭陀琴、望遠鏡、顕微鏡、天球、地球、ヨクタント、タルモメートル、其外奇物種々を見る。タルモメートルは蚕書を考えて吉雄自製する器と云。訳せば寒熱升降器と云べし。

(上巻、『梅園全集』上、106頁、名著刊行会、一九七〇年)

書架に溢れる「西洋の書」は「其版は銅を用ゆ。精巧言ふべから」ざる革装の大冊で、「天象地理の書より、物産の書には天竺本草・阿蘭陀本草」などが含まれていた。それを実見した梅園は、翻って「和漢本草の類、物産の窄狭なるを覚」えたという。梅園はまた吉雄亭で目にした「阿蘭陀琴」以下の多くの「奇貨」にも関心を示しているが、さすがというべきか、『帰山録』末尾の一節は、梅園の学問観を伝えて間然するところがない。

○道小なるに非ず、人これを小にする也。世の学者、門戸を立て区域を画するより、大にしては儒とも仏とも道とも神とも分れ、仏中には顕と云密と云、禪と云浄土と云一向と云法華と云。儒には朱子・王陽明・徂徠・仁斎など枝又枝を生じ、派又派を分つ。広き天地の誰惜む者世界をへりきりて人に与ふ。柳をば緑にさせて其緑を愛し、桃をば紅にさかせて其紅を愛する時は、火の燃えて上るも水のぬれて下るも皆用をなす也。

(同上、1102-3頁)

こうして梅園は「広き天地」を「へりきりて」細分化してしまふ「へりきり学問」を批判して、「天地よりして観る時は、理を論ずるも一学問、心を修するも一学問」といって、「天地」の大に立つことの重要性を説いたばかりでなく、

又今の学者かづら学を好む人あり。其葛と云はたとへば朱子の新註を見付たれば、我も我もとかづらを出してまきつき所を見ても本木を見る。本木倒るれば、かづらも亦倒る。是に於て今の学文は誰にてもちと孤立する者あらば、我も我もとかづらを出して巻く也。得失は姑置く。かづらと成らんよりは巻かるる木の勝るべし。今かく言ふも、かづらなるべしと我もをかしく思ひ侍りぬ。

(同上)

といて、「今の学文」は「かづら」が大木にまわりつくように、他者に寄りかかってようやく存在しているようなものだという梅園には、そういう自分自身もまた「かづらなるべし」と振り返る余裕があった。宋儒の出現以来、多くの人が「宋儒窮理の説」に寄りかかっているが、松村君紀が、「西洋の学、畢竟窮理の学也。務めて物の性を知るに在り。性を知るにて能物を成す」といったことにふれて、梅園はいう。

此窮理の字も性の字も宋儒の謂う所と同じきにも非ざれども、西洋の学は能くものの理を推し極め物の性を尽す。能く道を小にせず。物を天地の如く容れ、天地に達観せんとらば、能く天地の條理をしり、是非を大同上に分ち各好尚を海の如く容るべし。是乃天地を師とする也。

(同上、1104頁)

このように「天地を師と」し、「天地の條理」を明らかにするには「西洋の学」が有効とわかっていながら、五十六歳という梅園の年齢が障害となつたろうことが惜しまれる。

4 司馬江漢の阿蘭茶臼

三浦梅園が遠巻きに見ていた「西洋」との距離が一気に縮んだのは、司馬江漢においてである。江漢は梅園に遅れること十年の天明八年（二七八八）十月十一日に、耕牛の「おらんだ坐しき」を見物している。

イキリス細工のヒイドロ額欄間下二掛ケならべ、下二ハ椅スを並。其外奇妙なる蘭物ヲかざり、酒肴を出し、夜の九時過に帰ル、

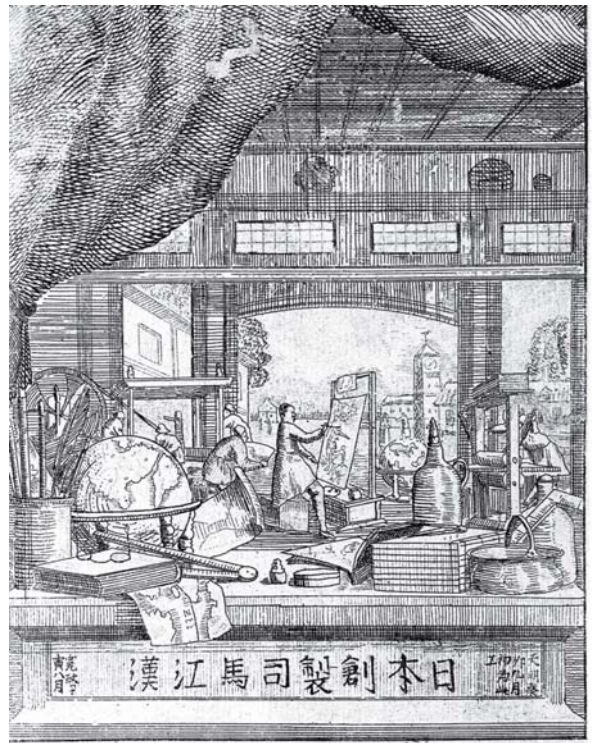
（『江漢西遊日記』四、全I、313頁、八坂書房、一九九二年）

また十一月五日にも、「枕元へ火ばち二ツ置キ、ドンス縮面の夜具を着て、彼ノおらんだ二階ニ休ミける」と記されている。翌六日も、

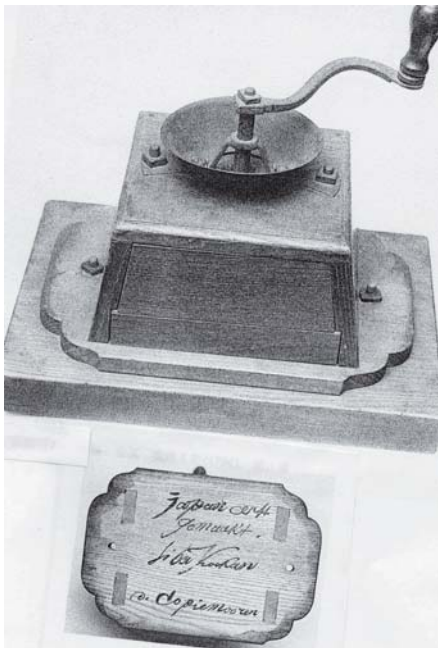
朝起キ勝手ノ方を見ルに、皆何もかもおらんだ風なり、夫より二階に登り椅子により、ヤギ小鳥を焼てポウトルを付喰フ、（中略）亦細工場と云処あり見物す、土間ニしてろく口挽キ、鍛冶道具其余奇妙なる形チの物数々あり、幸作細工ハせねと好事ニ色々あつめたる者なり、

（同上、326、7頁）

という観察を記している。こうした体験のうちに〈画室図〉（図1、寛政六年、一七九四）を描いたとき活用されたのではなからうか。まず画面の手前の台の上には、和本とともに洋装の大冊が置かれているのが目を引く。書物の上に置かれた眼鏡や、筆立ての羽ペンも当時と



（図1）



（図2）

してはモダンなイメージだったろう。コンパスや物差しもここでは重要な小物である。さらに地球儀や天球儀も、おおむね梅園が「阿蘭陀座敷」で目にした「奇貨」と一致している。中央で絵筆を揮う本人以外に、忙しそうに立ち働くスタッフの姿が、工房の雰囲気醸し出している。窓の外に描かれた時計台には、江漢の西洋の文物に対する憧れが形象化されている。この理想の画室を描くに当たっては、耕牛の「阿蘭陀座敷」のコレクションが参照されているにちがいない。

そればかりでなく江漢は「和蘭茶臼」まで制作し、それも複製数が現存している(図2、寛政六年、一七九四、同十一年)。山領主馬(一七五六〜一八二三)宛て書簡に、「臼は私ノ品、寛々御用可被成候」とあるのを見れば、知人に私用のコーヒーミルを用立てることもあったようだ(『司馬江漢百科事展』神戸市立博物館・町田市立国際版画美術館、一九九六)。ちなみに木下李太郎(一八八五〜一九四五)が、

今しがた

啜つて置いた

MOKKAのじほひがまだ何処やらい

残りあるゆゑうら悲し。

(「珈琲」、『食後の歌』、『木下李太郎詩集』岩波文庫)

と歌ったのは、百年以上後のこと、同時代人のなかでは帆足万里(一七七八〜一八五二)がまた別の反応を示して興味深い。

西人、古は「コツヒイ」と云ふ木の実を熬りて、漉茶にして用ひ、又「ピイル」とて麦にて渋酸き酒の如きものを造りて茶の代りとする。されど一たび茶を飲みては、是の二者は味あしくて飲まれずと蘭書にいへり。同書、日本茶の風味よきをほむ。

(『東潜夫論』岩波文庫、79、80頁)

当のオランダ人さえ不味いという「コツヒイ」を喫するため、「和蘭茶臼」を制作するのは粹狂かもしれない。しかしこのような「西洋」への親近があればこそ、江漢の西洋画は独特の域に達したのである。

たとえば〈驟雨待晴図〉(図3、ボストン美術館蔵)において、まず見る者の目を引くのは画面を斜めに過ぎる影のような風雨の表現である。激しい雨風が前景左手の樹木の枝をしなせ、その下の二人の人物を右手に向かって雨宿りに急がせている。画面中央で蓑笠に身を包み、背後から吹き募る風に足を踏みしめて進む人物は、画家自身の姿でもあるうか。その後ろに描かれている茶店は、手前の人物三人の大きさに比べていかにも小さく、ほとんど点景と化している。むろん蓑笠の人物は素通りしたにちがいない。手前の雨景とは対照的に、その向こう、画面中段には明るい空が広がり、晴れ間を待つあわいの時間が詩情ゆたかに描かれていて、ここにも「日本の大気と光の潤い」(芳賀徹「画人司馬江漢の世界」、『司馬江漢の研究』250頁、八坂書房、一九九四年)を見て取ることができるだろう。かのフェルメール(Jan Vermeer van Delft, 1632 - 75)の〈デルフト風景〉に匹敵するといえ、言い過ぎだろうか。

さて、江漢において見るべきは「西洋」から何を学んだかということである。周知のように、江漢は六歳のときに、「焼物の器に雀の模様」があったのを紙に写したり、狩野派の絵師について学びながらも、「和画は俗なり」として、宋紫石(一七二五〜八六)に師事して長崎派の画法を習得するかたわら、鈴木春信(一七二五〜七〇)の贋作作りにも手を染め、「春重」と名乗ってその頃流行っていた「鬢さし」姿を「写真」にしたところ、「世に甚行はれける、吾名此画の為に失はん事を懼れて、筆を投じて描かず」(『春波楼筆記』、全II、50、51頁)ということになって、ついに「画は其物を真に写さざれば、画の妙用

とする処なし」という結論に達し、「西洋画士」となったという経歴の持ち主だった。

蘭画と云ふは、吾日本唐画の如く、筆法、筆意、筆勢と云ふ事なし、只其物を真に写し、山水は其地を踏むが如くする法にして（中略）唐画の如く、無名の山水を写す事なし、又画を作るに、五彩の画の具は、皆膠水を用ひず、蠟油を以て調和して、之を造る、貴人の席上、酒辺の傍にて画く事能はず、文字と同じく戯に画く法に非ず、国用の具也、吾国の人は、万物を窮理する事を好まず、天文、地理の事も好まず、浅慮短智なり、予此日本に居て、吾国の人に差ふは、甚しき謬なり（同上）

江漢にとって絵画は慰みの閑伎倆ではなく、あくまで「国用の具」でなければならなかった。となると画業は「万物を窮理する事」につながってくる。ところが日本人は窮理が嫌いで「浅慮短知」だととして、その理由に日本人の「小気」を挙げている。

日本の人生得小気しょうきにして、何事をも人に伝ふる事を惜み、只一己の利潤ニせし故なり、彼国の人ハ志し異て人に伝へん事を欲す、蘭書「ホイス」「シヨメール」「コンストカヒネット」など云書物ハ皆大巻の書也、皆奇器を造る書ニして、画図を入れて符号の印を付、手を取て導よふにしたる者也、書面ニ不解所ありても、画図にて能曉し安し、小等其書中を閲して、西洋画并ニ銅版画及彫様押様其餘数品奇械を造る、（『おらんだ俗話』133頁）

このように西洋では知識を独占せず、「画図」付きの「書物」にして公開するために、そのおかげで江漢も「蘭書」を便りに「西洋画并ニ

銅版画」の「創製」が可能となったわけである。しかし西洋と日本のあいだには越えがたい違いがあった。

欧羅巴の人の性ニして人を教へ導かんとすると、我日本人志さし大ニ異なり、然とも我人ともに新ニ工夫出し、考へ極めたるハ容易に非ず、夫故に易々と人に授る事をせず、自然とおし秘する事也、何奈となれハ我利を失ふに似たり、是国風ニして上其人を挙す、称誉せず、人は財禄と位階との二ツの者より外欲る事なし、欧羅巴の国風として貴賤不拘、天性得所の才気を尊ひ挙用ゆ故ニや、其国妙をなす者多し、日本も其政ニ従ハ、才人四方ニ顕れ起らん歟、（同上）

何よりの問題は、日本では「財禄と位階」しか大事にされないことである。西洋のように個人の「才気」が尊重されなければ、事態は改善されない。江漢は考えていた。この体制変革のすすめは、同書末尾にも「若此理を取りて此国の永久なる事を思ふ者あらハ、彼国の法を取て国用とすへき也」と繰り返されているが、寛政十年（一七九八）段階でこの提言に耳を傾ける人がはたして何人いただろうか。

江漢はまた『和蘭天説』で、

西洋ノ諸邦、商舶ヲ万国ニ通ジ、其長官ナル者ハ交易ノ余暇、書ヲ編集スルコトヲ務トセリ、嘗テ到处ノ風土物産、或ハ身ヲ修、国ヲ治ルノ經典ヲ聴テ、己ガ邦ノ辞ニ翻訳ス（和蘭書中ニ有処ノ者ハ、皆万国ノ珍事ヲ誌ス者多シ）（全三、37頁）

というように、異文化理解に資する各地の材料を収集するのもオランダ商館長の重要な役目だったことに注目している。しかも空間を拡大

するばかりでなく、長期的な展望にも立っていた点も江漢は見逃して
いない。

今ニ至マデ欧羅巴諸州、性理ノ学ヲ好ミ、国王費ヲ厭ス大舶ヲ製
造シ、剛傑ナル者ヲ選ミ、国土ヲ見開カントス、千年ノ後ノ益ヲ
今爰ニ考ルハ、世界ノ中欧羅巴人ノ質ナリ、

〔和蘭通舶〕一、全・Ⅲ、158頁

こうして西洋に数ある国のなかで、

国ノ風俗人情親切ニシテ、天地度数及ヒ窮理学、人物躁カラズ、
且強勇ニシテ軍略ノ備ヘ常ニアリ、他州ト交ルニ礼讓ヲ厚クシ、
必大国ノ風韻アリ、貴賤能和睦シテ国務ヲナス、

(同上、165、6頁)

というように、「大貌利太尼亞ゴコロトブリクニヤ」すなわち英国をもっとも文明の進ん
だ国と捉えている。江漢においても大国評価の基準が、「人情親切」
や「礼讓」「風韻」といった側面に置かれていたことが注目される。

こうして「西洋」に親近感を深めていった江漢は、わけても人間性
の尊重に強い関心を寄せている。『春波楼筆記』のなかで、「天摩屋善
兵衛」なる人物の行状を述べたところに、「寵愛の一子」を失っても
動ずる様子がないのを、江漢は「形は人にして情なし、人として人の
情なきは、何を以て人と云はん、昔子を先だてし人の歌とて、有るも
のなきこそ本のすがたなれ、とは思へどもぬるゝ袖かな」といって、

「人の情」の重要性を強調し、「とは思へども」の逆接表現に万感の思
いを込めているのは、儒学・国学を通じての「人情」論と通底しつつ、
そこに止まっていない点が注目される。『和蘭天説』で西洋の書物に

言及した部分に、

嘗テ彼国ノ画図ヲ見ルニ、肩輿シタル図ヲ未見、馬ヲ以テ車ヲ率
セ御者前ニアリ、皆 四馬六馬ナリ、人ヲシテ牛馬タラシムル
コトナキヲ知レリ、人トシテ人ヲ貴ムコト如スト云、

(全・Ⅲ、75頁)

と書き入れているのは、ふだん「人ヲシテ牛馬タラシムルコトナキ」
社会を意識していなければ気づかないことであろう。「上天子將軍よ
り下士農工商非人乞食に至るまで、皆以て人間なり」(『春波楼筆記』
87頁)とする見方は、如見の「畢竟人間は根本の所に尊卑有べき理な
し。(中略) 況や人間本心の上におゐて、何ぞ貴賤の差別あらん」
(『町人囊』四) というのと同じ位置に立っているように見える。さら
にまたテツオ・ナジタ氏の指摘があるように、懷徳堂の思想家にも
「聖人モ人、此方モ人也」(「官許学問所懷徳堂講義」享保十一年丙午
冬十月五日癸亥、万年三宅先生講)として「人間であることの普遍性」
を説いていた事例もある(『懷徳堂 18世紀日本の「徳」の諸相』、3
「徳の探求」、子安宣邦訳、岩波書店、一九九二年)。しかし、その同
じはずの人間が実生活で一方は駕籠をかつき、他方は駕籠に乗るとい
う違いが生じるのは何故か？それは弁解の余地なく、「人トシテ人ヲ
貴ム」精神が希薄だからである。江漢が「人ヲシテ牛馬タラシムル」
ような社会に違和感を持っていたことは明らかである。そうした理想
的な生活を江漢は英国の社会に認めていた。

国ノ風俗人情親切ニシテ、天地度数及ヒ窮理学、人物躁カラズ、
且強勇ニシテ軍略ノ備ヘ常ニアリ、他州ト交ルニ礼讓ヲ厚クシ、
必大国ノ風韻アリ、貴賤能和睦シテ国務ヲナス、

『和蘭通船』(一)

第一、「風俗人情」は「親切」でなければならぬ。総じて「窮理学」にすぐれ、「軍略」も怠らず、他国との交際において厚い「礼讓」があれば、おのずから「大国ノ風韻」も感じられ、「貴賤」仲良く「国務」に励むというのは、さながら学芸共和国のような描写であり、まさにユートピアだった。

ところで、文化十三年（一八一六）田能村竹田の四十歳を祝って、未知・既知を問わず全国から寄せられた書画のなかに、司馬江漢の小品が含まれており、受け取った竹田はその所感を次のように記している。

司馬江漢の小景山水。江漢、西洋学を講じ、名一時に藉たり。画も亦た其の法を伝えて、一変す。茲の幅、僅かに三寸許、松五、六株を作る。一農夫有りて、其の下に耕耨す。草筆点綴、墨瀋淡染、陰陽を判ち、向背を分つ。明晦自然にして、人をして咫尺万里の想有らしむるなり。

〔竹田山莊藏書画記〕、『大分県先哲叢書』

「咫尺万里」とは、三寸ほどの小画面に「万里」の景色が描かれているかと思われるほど、気宇壮大な絵のことをいう。10センチ四方ほどの画面には、数本の松の木の下で耕作に従事する一人の農夫が「草筆」ラフスケッチで、墨の痕も「淡染」淡々と描かれているだけなのに、「陰陽」「向背」もはっきりしており、「明晦」明暗の変化も自然だった。当時、竹田は隠退後間もなく、伝統的な文人画家を目指していたところであるが、「西洋画」にも公平な態度で臨んでいたことがわかる。

一方、当時七十歳の老画家は人生に倦んで、あれほど入れあげていた「おらんだ」に厭き、老荘思想の「無」の境地にたどりついたとい

うのにもわかには信じがたいが、文化十年六月の山領主馬や江馬春齡（一七四七〜一八三八）に宛てて、「今ハ画も天文も窮理も細工もおらんだも、不残あきはて困入申候」（全Ⅱ、352頁）と伝えていた。江漢はしかし、素晴らしいながらも、『訓蒙画解集』の序に、

彼国の語にシンネベルと云ツて、譬を以て教へとす。聖人道德経と同し。故に今爰に古人の遺言数十話、小子窃に数言を後に附録して、下に画をなし、傍に国字を以解し、題して訓蒙画解集とし、童蒙の眼を覺んとて之に云フのミ。（全Ⅱ、170）

というように、まさに「啓蒙」活動の一環としての教訓書を作り、そこにはまた次に見るように「童蒙」に聞かせるだけでは惜しい教訓も含まれていた。

鶏対孔雀曰。先生全身被美錦。何為乎。孔雀不能答而云。吾不知何如矣。鶏笑曰。粧外者内無実。美錦歛於人之眼目而已。小子雖無粧焉。常発声昼夜告時刻。足下遐自異国来而。為吾国無用之物。見た処ハ利口さふにりつぱにして、思ひの外おろかなる者をおらんだ辞に、ぱアウと云、則孔雀の事也。亦表向をかさりて内証ハ一向に相違したる事を云。（全Ⅱ、162・297頁）

上欄に「自作」と書き入れているように、これは江漢の率直な所感であろう。夜明けを告げる「鶏」の実用性を評価する人には、いかに「美錦」であろうと「孔雀」は「無用之（長）物」で、「遐かに異国より来」る必要はないというのである。このように西洋伝来の文物や動物がすべて歓迎されたわけではないことはもちろんである。「孔雀」のような見かけ倒しは「ぱアウ」と、わざわざ「おらんだ辞」を用いて

否定している。

同様の見解は、西山拙斎（一七三五〜九八）の「逆火器」と題する詩に関連して述べた菅茶山（一七四八〜一八二七）のコメントにも示されていた。長い引用を厭わず、以下に拙斎の文章を書き下すことにする。

右の二器は紅夷の靦^ほめて造る所、本邦の巧人も亦た能く視て之れに倣う。余、嚮^{きま}に人身、火を出すの説を聞く。意うに、是れ信石の為す所、甚だ之れを畏れ悪む。近ごろ『紅毛雑話』を読み、其の然らざるを知る。今、其の器を諦観して、疑懼渙積す。

此れ蓋し硝子鍍金の摩軋して火を発す。尋常の鑽燧と同一理なり。但だ其の鉄索を伝わり人肌に透りて後、光を発するが怪しむ可きと為すのみ。而るに体中に火を生ずと称するは、妄謬笑う可きなり。嘗て聞く、西洋諸蕃、往往、幻を為して世を誑^{たぶら}かし、民を惑わすと。昔人云う所の理に因りて以て欺を售^うる者か。吁あ夫れ淫巧奇伎は工緻を極むと雖も、何ぞ以て君子の心目を眩するに足らんや。然れども近來、和蘭学を唱え、蛮画蛮字に耽り嗜む者、比艷として称す。甚だしきは中国・本邦の皆な及ばざる所と謂うに至る。孟夫子、言有り、「喬木を下りて幽谷に入るは、善く變ぜずと為す」と。其れ信に然らざらんや。余、廻ち記を為り、又た絶句を裁して、以て規箴を寓す。

〔拙斎西山先生詩鈔〕下、文政十一年刊

『紅毛雑話』は森島中良（一七五四〜一八〇八）が天明七年（一七八七）に奇談珍説を集めたもので、兄の御殿医・桂川甫周（一七五一〜一八〇九）から得たオランダ知識を伝える。「喬木を下りて幽谷に入る…」は『孟子』滕文公篇のことばで、深い谷から高い木に移るのは

文明化することであるが、逆に深い谷に入るのは野蛮な状態に戻ることにとして斥けられている条からの引用である。蘭学を喜ぶのはそうした退行現象だというのに対して、この条に付された茶山の発言は鋭い。

色目人は無用の器を嚮ぎ、有用の物を得て去る。其の心の巧は、則ち其の器よりも甚だし。

「色目人」は元代に西域の人々を指した呼称であるが、ここでは西洋人一般を指している。茶山によれば、「巧器」に感心している場合ではなく、警戒すべきは西洋的な「心の巧」である。この「心の巧」は「成徳」の道に抵触せざるを得ない。そしてこの延長線上に、拙斎の「泰西図説を読む」（同上）に付された茶山のコメントがくる。またしても長くなるが、詩三首を引用しておこう。

国家厲禁在耶蘇	國家の厲禁は耶蘇に在り
曾火蕃書警蠢愚	曾て蕃書を火いて蠢愚を警しむ
何事訪求吹遺燼	何事ぞ訪ね求めて遺燼を吹く
公然問世泰西図	公然と世に問いくる泰西の図

蕃人誇説大西洋	蕃人誇り説く大西洋
三帝十五皆富強	三帝十五皆な富強
縱是千年伝国永	縱い是れ千年 国を伝うることの永きも
寧同文軌秉綱常	寧ぞ文軌を同じくして綱常を秉らんや

蛮舶行窮五大洲	蛮舶行ゆく五大洲を窮む
輿凶兼造地天球	輿凶兼ねて造る地天球
妖言眩世播民志	妖言世を眩し民志を播がす

無乃覬覦逞詭謀 乃ち覬覦逞謀を逞しくすること無からんや

「厲禁」は厳禁。「耶蘇」が禁止されている以上、たとえヨーロッパの帝王が強大で「千年」の長きにわたって続いていても、その行き方に与するわけにはいかない。「文軌を同じく」するとは、文字と車輪の幅がどこでも同じである状態、すなわち天下が統一されている譬え。「綱常」は三綱五常、つまり君臣・父子・夫婦の道と仁義礼智信の道の謂であるが、ここでは「耶蘇」の教えを指している。「覬覦」は身分不相応な望みで、西洋の東洋への侵入を危惧する言葉である。これにまず、頼山陽（一七八〇〜一八三二）が次のようなコメントを付している。

此の首語、的切と雖も、刊行本に之れを載す。恐らくは世諱に触れん。詩も亦た佳ならず。

山陽が詩のできもよくないし、なにより「世諱」世の憚りに抵触するのではないかと心配したのに対して、茶山が反論する。

紅毛遠夷、彼を誚め、此れを警しむ。何の諱に触るる所か之れ有らんや。

このような茶山の、西洋人に対しては批判し、我が国には警戒を呼びかけるのに何の不都合があらうかという判断の背景には、次のような世界認識があった。

今もし蝦夷のものらを人となさんとせば、いづれの教をか先ほどこすべきや。（中略）欧羅巴などの教をしかば、やがて他国をは

かりうばふたくみなんいできて、先隣境の害をぞなすべき。（中略）さればをしへは聖人より中を得たるはなく、法は礼よりただしきはなかるべきなめり。
〔冬の日影〕上

十九世紀人の茶山もまた「蝦夷」の人々に対する偏見から自由ではなかったが、仮にアイヌの人々を文明化するとして、「欧羅巴などの教」によれば他国を侵略するおそれがあるので、「聖人」の教え、すなわち儒学による教化と、その「礼」による統治が最上だという点にいまは注目したい。「利用厚生」よりも「成徳」が強調されているのである。

茶山のこの反応は、単に感情的な反発ではなかった。というのも、茶山は積極的に西洋人に接近しようとしていたからである。文化十五年（一八一八）四月十六日、茶山は京都で阿蘭陀通詞の名村進八を介して「阿蘭陀人」を訪ね、



（図4）



（図5）

カピタン名はゾロムホフ年三十といふ。四十、五十の人と見ゆ。

〔大和行日記〕

と記したあと、エンゲレン、ハアゲンとそのとき会った人物の名を挙げ、「カピタンが所にて、蘭酒二品を出しのましむ。色白きは葉氣甚だしくて味よし。鶯色なるは、甘きに過ぎたり。ふかく酔はんことをおそれ、多くのまず」と記したばかりでなく、翌日も、「名村進八に托して蘭人の書を乞ふ」てもいるように、関心浅からぬものがあつた。黄葉夕陽文庫に、『西洋諸国人物図』（図4）や『ゼルマニア廓中之図』（図5）、亜欧堂田善画、『菅茶山とその世界Ⅱ』広島県立歴史博物館、一九九八年）などが伝えられているのはその名残である。

5 頼山陽の「蘭卮」

西山拙斎門下の詩人で、頼山陽のパトロンでもあった小野泉蔵の詩集に、「蘭製の杯、別れに臨み子行に贈る」と題する一首が収録されている。

不奈明朝分手回 奈んともするなし 明朝手を分かちて回るを
 離筵聊贈阿蘭杯 離筵 聊か贈る 阿蘭の杯
 恰将窄小称君量 恰かも窄小君が量に称うを得て
 帰到先斟軟脚醅 帰りに到らば 先ず斟め 軟脚の醅

〔『招月亭詩鈔』四、文政十二年序、天保十二年刊〕

子行は、拙斎の門人、菅野彊斎（一七六六〜一八三〇）の字。播磨の人で、竜野藩儒となる。「軟脚」は遠方から帰った人をねぎらって知友が催す宴会。「醅」は濁り酒。これを読んで、濁り酒に「阿蘭の杯」は似つかわしくないと山陽は思ったにちがいない。この詩にわざ

わざ次のようなコメントを付しているからだ。

某、蘭卮を喜ぶ。此れに非ざれば、以て飲まずして、小なる者最も喜ぶ所なり。蓋し小卮は久坐して細談し、漸く酔郷に入るに宜しきなり。又た曰く、聞く、履軒翁、玉卮を喜びて曰く、先ず其の色を賞し、後に其の味を領すと。

是れ先ず我が心を獲る者なり。世を挙げて漆盞を用い、一生、琥珀の光を知らざるなり。況や丹釀の佳なる者、色は暁月の水に在るが如きも、玉卮に非ざれば、見る可からざるなり。

これによって懷徳堂の中井履軒（一七三二〜一八一七）とともに、山陽も「蘭卮」（図6、参考図、財団法人角屋保存会蔵、『異国の風—江戸時代 京都が見たヨーロッパ—』京都文化博物館／京都新聞社、二〇〇〇年）を愛用していたことがわかる。グラスが小さいと酔いの回りも遅く、その間ゆっくり話もでき、「久坐・細談」に「小卮」はぴったりだというのである。

ちなみに「暁月の水に在るが如き」透明感を愛した詩人としては海彼にも例がある。ベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1637）周辺の詩人、ロバート・ヘリック（Robert Herrick, 1591-1674）の「われ酒を愛す」と題する短詩は、次の句で始まっているからである。

美酒を満たすのは矢張り透明のさかづきだ。



〔図6〕

さうすれば生得無垢、雑り気ない葡萄の色も見られよう。

（森亮訳『ヘリック詩鈔』岩波文庫）

ところで文政九年に山陽は、当時江戸滞在中の小原梅坡（一七七五〜一八三二）に宛てて、次のような手紙を送っていた。

幸便有之、御留守へ家人（梨影）より寸楮を上、御見舞申候由故、又附隻字候。東土如何、滔々不帰、御無聊奉察候。私も無事、唯酒にて送日候而已、風は引どふし也。

そして「灯を挑げ、被を擁し、微醺を取る」に始まる七絶を記したあとに、

時に、有一事奉煩託、いつぞや拝見候御所持のギヤマンキリコ酒飲猪口、東土にて御調のよし。あの通のもの、何卒御買被下、御持帰可被下候。御帰期遅ければ御上せ、賃先払被下候てもよし。其値段勿論被仰聞、御帰の時可奉償候。

（『頼山陽書翰集』下、名著普及会、一九八〇年）

と依頼したのが、「孟冬（十月）十八日」のことだった。「微醺」はほのかに酔って顔が赤くなること。このとき山陽はすでに四十七歳、「ギヤマンキリコ」の注文は、「蘭卮」愛用を『招月亭詩鈔』に書き入れたわずか二、三年前のことで、「キリコ」、いわゆる江戸切子が創製される天保五年（一八三四）に先立つ八年前のことだった。してみると山陽の「蘭卮」は梅坡を通じて江戸より入手したものかもしれない。たとえば八百善主人・栗山善四郎の『江戸流行料理通初編』（文政五年刊）に収められた鋏形蕙斎（一七六四〜一八二四）描くところの挿



（図7）

絵のなかで、右端の人物（大田南畝、一七四九〜一八二三）が手にしているのは確かに「ギヤマンキリコ」の杯である（図7、『江戸の文人交友録 亀田鵬斎とその仲間たち 渥美コレクションを中心に』世田谷区立郷土資料館、一九九八年）。さらに中央向かいの亀田鵬斎（二七五〜一八二六）の手元にあるのも、形は違うがギヤマンキリコであるのを見れば、当時の流行だったのであろう。それを見た梅坡が早速入手し、さらに山陽が影響を受けたのもあったろうか。

もっとも周知の『芝蘭堂新元会図』（早稲田大学図書館蔵）を見れば蘭学者のあいだでは寛政六年（一七九四）の新年会から既に「ギヤマンのコップ」でおそらく葡萄酒が酌みかわされている様子が描かれていた（森銑三『おらんだ正月』岩波文庫、10〜15頁）。山陽の創意はしたがって葡萄酒から日本酒に転用した点に認められよう。

さらにまた「丹醸の佳なる者」とは、山陽が愛飲していた伊丹の酒「劍菱」などを指している。その水面に映る有明の月の光のような色を愛でるにも「玉卮」は最適だった。山陽は「大塚鳩斎翁墓碑銘」のなかで、

伊丹の酒、醇醲を主とす。一変して清淡峻冽を為す者は、鳩斎翁に訪まる。（中略）新たに清醲を造り、泉川と曰う。

（『山陽遺稿』文・三、『詩集日本漢詩』10、汲古書院、一九八六年）

と記している。「醇醲」はまじりけのない、こってりと濃い酒。「清醲」は澄んだ酒、清酒。

そして文政十年の執筆にかかる「長古堂記」には、こう記されている。

伊丹の酒、天下に醇たり。而して坂上氏最も醇と云う。蓋し釀戸亡慮七十余家。舶載して江都に輸す。歳に三十余万斛を以て、率と為す。（中略）劍菱氏の堂を長古と曰う。其の家、世よ、籍を平戸侯に通ず。侯の命ずる所、其の父祖より善く高寿を享くるを以ての故に、之れを莊子の上古に長ぜるも寿と為さず取るなり。余、謂えらく、上古は寿多し。而るに後世、否らざるは何ぞや。亦た醇醲異なるを以ての故に非ざるかと。醇は則ち質。質は則ち渝らず。渝らざれば則ち久し。醲なる者の紛紛として更変するが如きに非ず。寿たる所以なり。人の寿夭は然るなり。道の寿夭も亦た然るなり。孟軻氏の醇の醇なるを以て第一流に居る、説く所は仁のみ、義のみ。俯して楊墨諸子を視れば、奇怪百出、生滅通変す。而るに孟子の道は、万世依然たり。是れ道の寿なり。劍菱の百家の釀における、其れ猶お此のごときか。其の家風、醇質渝らず。熙熙として上古の如し。以て世よ、寿考を享くるも、亦た猶お此のごときのみ。余、其れ今の主人を識る。亦た深醇和毅なること、其の酒の如し。吾れ其の家声を墜さざるを知るなり。近者、来たりて余に堂記を作らんことを請いて、曰く、敢えて侯賜を虚しくせざるなりと。其の意を察するに、侯の命名を榮として、余が記を以て重しと為すが如しと。嗚呼、侯は貴なり。其の国は環するに玄澗を以てす。鯨魚出没するは、莊と謂う可し。然れども沢の及ぶ所、封疆限り有り。坂上氏の造、澗の如き者、数千里外に翁張し、王侯将相を涵濡沈酣させ、下りて士庶に至るに孰与れぞ。且つ世に耳有る者は、酒に劍菱有るを知らざる莫くして、某侯は某土を守り、某の爵秩を係くるも、或いは尽くは知らざるなり。而るに況んや一腐儒、余が如き者を知らんや。其の文章の波瀾、固より劍菱の一斗に敵する能わざるなり。何ぞ敢えて其の堂に記して、能く之れが重きを為さんや。独り学道の醇に

至りては、或いは比す可き有らんか。迂闊の願ひ、士を造ること酒を造るが如く、以て世を沢し、同に寿域に躋らんことを得んと願わんと欲す。万一に庶幾して、未だ能わず。辞せずして慨然と筆を奮う所以なり。

（同上、六）

語釈を少々。「上古に長ぜるも寿と為さず」は、『莊子』天道篇（岩波文庫第二冊150頁）の言葉。「醜」は醇の反対で薄酒。「孟軻氏の醇の醇なる」は、韓愈（七六八〜八二四）の『昌黎先生集』卷十一「読荀（子）」に「孟氏醇乎醇者也」とあるのに拠る。「翁張」は閉じることと開くこと、開閉。「涵濡」は浸し潤す。「沈酣」は酔いつぶれること。「爵秩」は爵位と俸禄に、盃の意をかけるか。「波瀾」は詩文に変化や起伏があるたとえ。山陽はここで一旦は「平戸侯」に譲るかと思せながら、「沢の及ぶ所、封疆限り有り」影響力は藩内に限られるのに対して、劍菱は全国に流通し、「王侯将相」から「士庶」まで皆知らない人はいない。山陽にしても「独り学道の醇に至りては、或いは比す可き有らんか」と自信のほどをうかがわせている。

また同時期の作「劍稜主人の茶籃に題す。主人、飲を解さず」には、次のように詠まれている。

梨花蕉葉無分 梨花蕉葉分とする無く
石鼎風炉可娛 石鼎風炉娛しむ可し
家有青州従事 家に青州従事有り
翻然嬖使酪奴 翻然として酪奴を嬖使す

（『山陽遺稿』詩・二）

「梨花蕉葉」は小さな酒器のこと（陸元光「回仙録」、『百家詩話』所収）。「分とする」は喜んでする意。ここでは酒杯は無用として、茶道具の「石鼎・風炉」は楽しんで使うというのである。「青州従事」は

美酒のたとえで、反対は「平原督郵」という（『世説新語』術解）。「酪奴」は茶の異名。せっかく酒造りを家業としながら、下戸だった劍菱主人は煎茶趣味に生きていたことが知られる。

一方、劍菱から届く「清醪」の美しさを「蘭卮」で味到しながら、山陽は依頼された「記」のなかで「啗蘭究理の説」にふれて、次のように論じているので、以下適宜、改行しながら引用したい。

理窟記

相良孟符、医を学んで、最も啗蘭究理の説を喜ぶ。其の齋に顔して、理窟と曰う。而して記を余に索む。

余曰く、理、豈に窟有らんや。理にして窟有らば、之れを理と謂う可からず。理なる者は天地に弥り、古今に亘り、内外有ること無き者なり。上にして日月星辰の行く所以、下にして山川草木の著く所以、中にして父子君臣夫婦朋友賓主の文る所以にして、治乱興亡得失の別る所以は、往くとして理に非ざるは無きなり。其の所謂る窟なる者を尋ぬるに、果たして何くに在りや。

且つ夫れ啗蘭人の理と曰う者は、理に非ざるなり。気なり、数なり。気と数とは、形有るも、理は則ち跡無し。跡無き者は、目を以て視て、心に揣る可からず。其の目を以て視て、心に揣る可き者は、細やかなること、毫毛に入り、微かなること、眇忽に至ると雖も、皆な形有るを免れざる者なり。理には非ざるなり。

然らば則ち、吾は何を以てか子の理窟を記さんや。以てする無ければ、則ち説有り。子の所謂る理なる者は、條理なり。今夫れ人の骨節筋脈臟府には、各おの條理有り。日月星辰の行度有るが如く、其の條理を得ざれば、治、得て施す可からず。之れを兵を用うるに譬うれば、先ず其の山川谿路の由る所を詳かにす。乃ち以て行を啓く可きなり。

漢医の説、備わらざるには非ざるなり。而るに咽蘭は必ず人を剖解して、之れを験す。其の目視して、心に揣る所の者に非ざれば、敢えて言わず。細、毫毛に入り、微、眇忽に至るは、躁者の能く弁識する所に非ず。必ずや百事を勅断し、鶏犬の声到らざる処に卷身潜慮せん。一室の内は、蛄穴洞天の如し。妻、若しくは子と雖も、之れを敢えて窺う莫し。而る後、万里の外なる泰西諸哲匠と、且暮に相い遇い、以て彼の人身の條理を論ず可し。則ち孟符の理、固より窟無かる可からざるなり。是れ以て記と為す可きか。抑も所謂の條理の、万里の外に説く所と、符節を合するが如きは何ぞや。其の然る所以の者は、必ず在ること有らん。是れ恐らくは泰西の未だ揣る能わざる所ならん。侘日或いは子の窟に造るを得て、吾れ將に子と之れを論ぜん。

〔山陽遺稿〕六)

「勅断」は、条理だてて判断すること。ここで山陽は初めに「理」に「窟」はないといながら、オランダ人のいう「理」は、じつは「氣」「数」のことで、「理」ではなく「形」であるということ前置きにして本論に入る。あなたのいう「理」は「條理」である。人体でたとえれば、「骨節筋脈臟腑」にそれぞれしかるべき「條理」があるようなもので、目で見ることのできるものである。さすがに微細な点を観察するさいには、外部の雑音を遮断して洞窟のような室内に籠もり、家族も遠ざけて注意を集中しなければならない。だとすると、君の「理」の達成には「窟」が必要ということになる。しかしこの「條理」が「万里の外」に説くところと一致するのは何故かという深い理由については、「泰西」の人にもわかっていないはずだから、こんど議論しようというのが大体の趣旨である。

すでに三浦梅園も、「多賀墨卿君にこたふる書」において、

夫、人は天地を宅とし居るものに候へば、天地は学者の最も先それに講ずべき事に御座候。尤も天文・地理、天行の進歩は、西学入候て段々精密にいたり候へ共、それはそれ切にして、天地の条理にいたりては、今に徹底と存ずる人も不承候。

(尾形純男・島田虔次編注訳、『三浦梅園自然哲学論集』岩波文庫、23頁)

といい、世界に充滿する「氣」の「精英」が「人の神」で、これを「心」といい、その状態はといえば「唯活澆々地、俗にいはゆるびちくなり」(同上、34頁)と俗語を交えながら説明していたのが想起される。しかし山陽の「記」の見所はむしろ行文の自在にあって、理に窟はないといながら、それがいつのまにか、なくてはならないものに変化しているレトリックにあるだろう。しかもその「窟」は「万里の外なる泰西諸哲匠と、且暮に相い遇い、以て彼の人身の條理を論ずるためにも必要なのだ。山陽も開明派儒者のひとりに数えてもいいだろう。

注

(1) 宮瀬竜門については拙稿「徂徠学派の崩壊」(『和漢比較文学叢書』7、汲古書院、一九八八年)および「李彦瑣の横顔」(『金城学院大学論集』人文科学編第二巻第二号、二〇〇六年)で言及したことがある。また新井白石以降の西洋との関連については、前田勉『江戸後期の思想空間』第一編第三章を参照(ペリかん社、二〇〇九年)。

(2) 一般的な事績については、片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門耕牛』(丸善ライブラリー、二〇〇〇年)を参照。

(3) 小原梅梅坡については、拙稿「岡山吟社の人々―『詞筵一聚』解説―」（『詞筵一聚』太平文庫50、太平詩屋、二〇〇三年）を参照。

〔後記〕小論は二〇〇八年十月十六・十七日の両日、パリのInstitute National d'Histoire de l'Art (INHA) で開かれたグルベンキアン財団 (Centre Culturel Calouste Gulbenkian) ・高等研究院 (École Pratique des Hautes Études) ・フランス国立極東学院 (École Française d'Extrême-Orient) に於ける「一六世紀―一九世紀間の日欧文化比較」のロケットに招かれ講演したさいの原稿「江戸の儒者が見た『西洋』と『古代の理想』」に、その一週間後の十月二十三・二十四日の両日、ライデンのMuseum Volken Kundeを会場にして開かれた国際研究集会「知的ネットワークとしてのオランダ東西インド会社」で発表した原稿“‘At the break of the modern age: The VOC and Japanese Intellectuals’を合成・取捨して一文としたものである。両学会に参加するきっかけを与えられた極東学院のラシヨール (François Lachaud) 教授と、シュテルンボッシュ大学のハイヘン (Siegfried Huigen) 教授には、改めて深甚の謝意を表す。グルベンキアン財団のジュネロシティに対する感謝はいうまでもない。その後さしたる間隔を置かず (二〇〇九年二月二十八日)、国際日本文化研究センターの笠谷和比古先生を代表とする「18世紀日本の文化状況と国際環境」共同研究会で、小論と同じタイトルで発表させていただいたのは、こうして小論をまとめるきっかけとなり、その前後、旧角倉邸の料亭で催された懇親会ともども忘れがたい二日間となった。しかし結果として、成り立ちの異なる前稿を無理に合体させたために、焦点の定まらない散漫な構成になってしまったことが惜しまれる。

なお蛇足ながら、アムステルダム大学のコルフフィン (Elmer Kolfin) 教授の薦めで帰途、立ち寄ったゴッホ美術館で、歌川広重

(一七九七―一八五八)〈名所江戸百景、大橋あたけの夕立〉の油絵による模写と、同じく江戸百景より〈亀戸梅屋舗〉(図8)の模写を裏見して、ことに後者の画面両脇に書き込まれた「新吉原云々」「大黒屋云々」と読める漢字には、ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890) の真情があふれているようで、心底感動した。ここには司馬江漢が自画にローマ字でサインを入れた心理以上の浮世絵を生んだ江戸文化に対する憧憬が認められる。私は不覚にも『ゴッホの手紙』上巻にエミル・ベルナル (Emile Bernard, 1868-1941) が序文を寄せ、ゴッホがいかに多くのことを日本の浮世絵から得ていたかと記していたのを失念していた。それによれば、パリのゴッホの部屋の壁には「日本の版画」が「鋏で貼」ってあったという。

われわれはよほど日本版画に熱中していたと告白せざるを得ない。ヴァン・ゴッホはある田舎者がもっていた反古を買って、私の習作と交換してくれた。われわれはこれを眼と精神の糧にしようと誓い合った。近代の芸術に対する日本の影響を忘れてはならない。それは、人々を活気づけ、装飾的感覚をよみがえらせ、鑑賞家を在り来りの無型式な引写しや平凡さから離脱させるのに役立った。

そしてベルナルは「ヴァインセントがアルルから最初に送り出した作品は、この東洋芸術から生れた忠実な娘であった」とさえ記している。そしてゴッホ自身が、一八八八年三月のベルナル宛て第二信に、

約束通り筆を執ってみたが、まずこの土地の空気は澄んでいて、明快な色の印象は日本を想わすものがある。水は綺麗なエメラルド色の斑紋を描き、われわれが縮緬紙の版画でみるような豊かな青を風景に添える。(中略) もし、日本人が彼等の国でまだ進歩

していなければ、その芸術は当然フランスで引継がれるだろう。

(裕伊之助訳、岩波文庫、91頁)

と記して、〈はね橋〉の素描を書き入れているのを、かつて感動して目にしたはずだが、画を見るまですっかり忘れていた。

折しも今回のグルベンキアン財団のコロックには、レヴィ＝ストローヌ (Claude Lévi-Strauss) 博士の "Le Regard Eloigné" 「遙かなる視線」がライトモチーフとして掲げられていたが、まさにそうした視線の交差が何世紀にもわたって続いていたようだ。というのも、レヴィ＝ストローヌ氏自身が『悲しき熱帯』の「日本の読者へのメッセージ」で、五、六歳のとき画家の父親からもらった「一枚の広重」がいかに「美的感動」をもたらしたかについて述懐しているばかりでなく(川田順造訳、『世界の名著』59、中央公論社、一九六七年)、後年の「プッサンを見ながら」のなかにも葛飾北斎(一七六〇～一八四九)や河鍋曉斎(一八三一～八九)、また世阿弥(一二三六三?～一四四三?)についてのさりげない言及が散見するからである(『みる きく よむ』三十九頁以下、竹内信夫訳、みすず書房、二〇〇五年)。こうして今さらながら、とんでもないテーマを取り上げたわけで、破綻をきたさずに稿を終えることは到底不可能だったと言わざるを得ない。